「青カン」労働者の告発

「こんばんわ。だいじょうぶか。そんな所で寝たら死ぬで！」

日雇い労働者の街・釜ヶ崎で、ドヤ代が払えずに寒空の下で青カン（野宿）する労働者への「夜間パトロール」が昨年十二月二十五日から続けられている。第十一回越冬闘争実行委員会と支援のキリスト教釜ヶ崎越冬委員会の手によって、この間一時保護された人は延べ二千六百三十六人。そのほとんどが仕事にアブレた高令、障害、病弱者だ。一月十六日の夜、明日の仕事のあてもないまま吹きさらしの路上にうずくまる人たちの表情を探ってみた。

午後9時。喜望の家二階でのむすび会（断酒の会）を終えて階下の娯楽室に行ってみると、在日韓国基督教会のRさんがビルマとスリランカからのお客さんを連れてパトロールに参加すべく待っていた。二人は吹田市で技術研修をしているという。滞日五週間というのに日本語を上手に話す。

午後9時30分。二階集会室でパトロールのオリエンテーションがはじまる。この日のキリスト教越冬委員のパトロール参加者は京都保専の学生二人、住吉区の聖家族の家のシスターとワーカーの三人、ふるさとの家の神父、西成ベビーセンターの牧弔夫人の計十一人。お互いに自己紹介をする。昨夜のパトロールの情況報告、パトロール中の注意、組み分けなどが話し合われる。

▶社会医療センター前のふとん

午後9時50分。防寒コートに手袋、救急箱、懐中電灯、記録用のノートを片手にリヤカーを引いて新今宮駅前の大阪社会医療センター前へ道を急ぐ。ドヤ街の谷間に三カ月が浮いている。ストーブのある部屋から急に出たので、どっと寒さがしみ込んでくる。時間が早いのだろうか。立ち飲み屋にはまだお客があり、一杯気嫌の労働者が道をうろついている。

「今夜も冷えるねー」　センター前の布団には、すでに八十人ぐらいの労働者が保護されている。越冬闘争実行委員会の「おにぎり」配りに列が出来る。今夜のパトロール隊は合わせて三十人ぐらいだ。

新今宮小学校の角では私服警察官がこちらを監視している。西成警察署に直結のテレビカメラといい、彼らは何を監視しているのだろうか。

午後10時10分。「病人はきっちり入院するように……、働ける人は仕事へ行くことを基本にこれからパトロールをはじめます」。病人を運ぶためのリヤカーを引きながら北と南の二手に分かれて巡回をはじめる。夜空に白い息をはずませ、路地の暗がりやガード下をたんねんに見て回る。

午後10時20分。冷え込みが身にしみる。身を切るような寒さ。パトロール隊は水たまりの氷の張った通称釜ヶ崎銀座の路上をゆっくり歩く。先頭の一人が歩道の上であおむけに倒れている中年労働者を見つけた。よれよれの作業ズボンに泥だらけの草色ジャンパー姿。顔が黒くむくんで生気がない。「どないしたんやー」。からだを揺り動かすとうす目をあけるが、疲労でしゃべれない。「そんな所で寝たらこごえ死ぬで！」。心配そうにのぞき込むパトロール隊をよそに無意識の世界にひきずり込まれるように目をとじる。「リヤカー！」。さっそくリヤカーに収容して医療センターの軒下に敷いてあるふとんの中へ。残りのパトロール隊は先きを急ぐ。

かすみ町交叉点からパトロール隊はさらに二手に分かれ飛田本通り商店街と市立更生相談所の通りを巡回し、通称しょんべんガードで一緒になる。釜ヶ崎は四方がガ

ードに囲まれ、ガード下がいわば門代りとなっている。労働者を寝かせないためだろうか。水が打たれた歩道は歩きにくく、せつない。

午後10時40分。西成警察署玄関前に二人の労働者がうずくまっている。警察に助けを求めたのに相手にされなかったのであろうか。「センター前のふとんに行かへんかー」。コートに猫のようにくるまっていた労働者は起き上がったが、もう一人は動かない。四人がかりでかかえてリヤカーに収容。

通称三角公園では二カ所でたき火をしている。釜ヶ崎には四つの公園があるが、鉄柵が張られていないのはここだけだ。西成警察署裏の通称海道公園は一カ所だけ扉があいていて「炊き出しの会」が朝、昼、夜の三回たき出しを行っている。越冬に入って夜間だけテントを張ろうとがんばったが、警察にはばまれてテントを張ることができない。

三角公園のコンクリートの舞台のふとんの中では六人の労働者が青カンしている。様子をうかがうとこのいてつく寒さの中でいびきをかいている。せっかく寝ているので声をかけないようにする。ドラム罐のたき火には制服の警察官がいたが、こちらが近づくと姿を消した。黒いジャンパーに新しい雨靴をはいた見なれない若者が二人、ダンボール箱をちぎってはたき火にくべる。「ドヤあんのか」。二人は、今日、九州から出てきて、金もないのでどうしたらいいのかわからないという。どんな事情か、何かおどおどしてあまり話したがらない。仕方がないので、ともかく今夜はセンターのふとんに泊ったらどうかとすすめると、喜こんでついてくる。「気が向いたら相談にくるように」すすめる。三角公園で青カンしている人は十八人。そのうち四人がセンターのふとんに保護された。残りはたき火を囲んで夜をあかすだろう。

この寒さの中で、一晩青カンしたら身体もがたがたになる。一晩中たき火に当たると煙でまっ黒だ。この夜、パトロールが終った午後11時20分までの間、パトロール隊は路上や公園での青カン者百四十五人をかぞえた。センター前のふとんに保護されたのは百人。ふとん保護されたある労働者は「仕事に行きたくても仕事がないのや。二日間、何も食べんと動かなんだ。ありがとう」と両手を合わせた。

第十一回越冬闘争がはじまった昨年十二月二十五日から一月十六日までの二十三日間、パトロール隊がかぞえた青カン者は延べ三千四百十二人、一日平均百十六人になる。そのほとんどが病弱、高令、障害者だ。かって、日本各地のビル、道路などの建設にたずさわってきた勇者が、今夜、釜ヶ崎の寒空のもとで青カンを強いられている。この実態はわたしたちの在り方を根底から告発している。「しんどい」ことだが、この告発に全身を傾けていきたい。

◀やがて悲しきアルコール▶

離乳食にビール

離乳したばかりの赤ちゃんをこともあろうに水割りビールで育て、アルコール性肝臓障害で死なせた十九才の母親がシカゴで逮捕されたことが明らかにされた。

警察の調べによると、この母親はダイアン・ケントで、赤ちゃんが生まれて三週間後から、毎日〝ビール食〟を与えていたことを認めたという。死亡したとき赤ちゃんは生後五カ月だった。

（時事AFP）

飲みすぎは女性

スコッチ・ウイスキーの本場英国で、一九七〇年から七八年の間に女性のアルコール中毒による死亡率が二倍以上の一三％も増えている。

英厚生省の調べによると、アル中患者の増加率もその間、男性が七七％だったのに、女性は一三七％。さらに酒が原因で犯罪に走る男性は二七％増えたが、女性は六四％増とうなぎ上り。

「自立した女性」が昨今のはやりになっている折から、まず酒の面で男性に一矢をむくいたということか。

（共同）

生きることの難しさ

キリスト教釜ケ崎越冬委員会専従　土井美保子さん

キリスト教の人たちが釜ケ崎の「越冬」に関わるようになって六年。地域の釜ケ崎協友会と関西キリスト教都市産業問題協議会（KUIM）とで今年も「キリスト教釜ケ崎越冬委員会」（代表小柳伸顕牧師）を組織し、夜間パトロール、医療相談、病院訪問などを行っている。

土井さんは今春聖和女子大学を卒業の予定だが、学生の身分のまま昨年十二月から越冬委員会の専従として活動をはじめた。

「わたしが、はじめて釜ケ崎のことを聞いたのは大学三年の夏でした。『教育以前』を書いた小柳先生が講演してくださって、そのとき、ひと言『実際に行ってみないとわからない』と言われたことが残りました。それから『教育以前』を読んでみて、そんなことが実際にあるのか信じられなかったんです」

土井さんは淡路島のお寺の住職の長女として育った。お父さんは当然、土井さんがお寺を継いでくれるものと期待した。ところが、高校二年のとき、『倫理社会』の教科書で聖書の言葉やキリストに出合い、興味が出て「衝動的」に教会を訪ねた。それを知って、お母さんは理解してくれたが、お父さんは泣いて怒ったという。その後、ミッションスクールの聖和女子大学に進学。日本キリスト教団能勢口教会で洗礼を受けた。

「一年のときはすごい真面目でした。三年の頃からいろいろな方面に目を向けるようになりました。世の中の汚ない面を知らないで育ったからかも知れません。昨年の冬、セミナーではじめて釜ケ崎にきて、なんでこんな所があるのか不思議でした」

土井さんは教会や大学で「あなたはどこにいるのか」と、いつも問われている感じがしたという。そこで、釜ケ崎や生野に行ってみて、そういう問題の中で自分の立っている土台をしっかりさせたいと考えた。そして三月に一ヵ月、関西労働者伝道のインターン生として、釜ケ崎の喜望の家の娯楽室子供の広場、愛徳姉妹会などで実習をし、引き続き結核病院の訪問や釜ケ崎地域問題研究会に関わるようになった。

「十月頃から釜ケ崎で働きたいと思ったんです。でも、学生だし働く場がないということで半分あきらめていました。ところが、小柳先生や大学の先生に相談して、思いがけず越冬委員会専従の道が開かれたんです」

越冬委員会の記録、印刷、外部からの電話の応対、あるときは深夜まで、土井さんの仕事には限りがない。それを嫌がることなく、こつこつとこなすお嬢さんだ。ある労働者は「芯がしっかりした人」と評する。

「毎日、失敗の連続ですが、一つひとつの仕事を誠実に果していきたいと思っています。一人の人間が決して容易に生きれない現実を目の当たりにして、生きることの難しさ、釜ケ崎のもつ根深さを新たに考えさせられています。他人の苦しみに共感し、自分に対してきびしく、一生、門の前に立ち続けたいと思っています」

「越冬」が終わっても、これから年間を通して土井さんの仕事は続く。一人の結核患者が自立していけるように、どのような働きを形作っていくかが今後の土井さんの課題だ。決まった道があるわけではない。

▶結核ケースワーカー入佐明美さんと右側が土井美保子さん

釜ケ崎通信

○…相変らず厳しい冬を迎えています。昨年十二月二十五日から越冬支援を続けています。労働者が中心となって朝九時、昼一時、夜七時の炊き出し。社会医療センター前のふとん敷き。夜間パトロール。相談・病気の労働者同志の助け合いに輪が拡がることを願っています。

○…「山谷からのお便り」にあるように、やはり釜ケ崎でも年末年始に仕事が少なく、そうなると「顔づけ」といわれる労働者選択がまかり通ってしまいます。病気の労働者、障害者、高令者などはどうしても仕事にアブレ、青カンを余儀なくされてしまいます。しかも、山谷の場合は、東京都が寒期特別対策事業を行っていますが、大阪ではそれがありません。つらいことです。

○…今年の越冬では、越冬闘争実行委員会がきっちり相談を受付け、かなりの病気の労働者が入院しました。仕事場に問題があって仕事に行けない労働者は、そこで問題を解決していく戦いをはじめるようです。そのため、夜間パトロールは一月一杯でカンマ（、）を打ちました。キリスト教釜ケ崎越冬委員会は、一人の労働者の完治を求めて病院訪問などを強化していきます。

○…話は変りますが、「釜ケ崎コミュニティセンター構想」が成文化されました。これは釜ケ崎での十七年間の活動を総合化し、今後の活動を継続していくための構想です。今のところ、日本福音ルーテル教会で基礎固めをし、しかるべき時期に公開して皆さまのご協力をお願いする予定です。

○…E・ストロームさんもこの構想が完成するまで〝がんばる〟と言っています。少なくとも一九八五年の春までは釜ケ崎で活動を続ける予定です。ご協力をお願いします。

○…「喜望」も今月から体裁を変えてみました。少し読みづらいとは思いますが、物価高騰攻勢に備えて身軽にしました。文芸、論集のようなものを年に一回ないし二回ぐらい発行できたら、と考えています。「喜望」はニュースを多く掲載していきます。

○…キリスト教釜ケ崎越冬委員会の中間報告集会が二月八日、天王寺カトリック教会で開催されました。次号で越冬の報告をいたします。では、お元気で。

募集しています

釜ケ崎コミュニティセンターでは次のように人を募集しています。いずれも、地味な地域活動を支えるいわば〝縁の下の力持ち〟的仕事です。

●喜望の家会計

人員　一人
期間　四月から長期
仕事　毎週三～四日、喜望の家・西成ベビーセンターの会計業務（曜日、時間については相談）
月給　八万円

●喜望の家　娯楽室（パート）

人員　一人
期間　至急
仕事　毎日午前八時半～十時半、喜望の家娯楽室（図書と喫茶の接客）
時給　五百円

●青少年センター

人員　一人
期間　四月から一年
仕事　毎週火・木曜日午後七時～九時、中学生の学習（英語数学）・生活指導
時給　千円

●ボランティア

人員　二～三人
期間　三月から長期
仕事　毎週金曜日午後七時～九時むすび会（断酒の会）のお世話。娯楽室の手伝い。

一九八一年二月二十日発行
喜　望　第七〇号
定　価　一部五〇円
一年（〒共）一三二〇円
編集兼発行人　重野信之
郵便番号　五五七
大阪市西成区
萩之茶屋二―八―一六
電話〇六（六三二）一三一〇
発行所　喜望の家
振替口座　大阪九五二〇五